

| | |
|--------|-----------------------------------|
| 学年部会 | テーマ 『情報活用能力の育成に向けた学習活動一覧』の実践部会・1年 |
| 実践内容 | 『受け手を意識した伝え方』を育てていく取り組み |
| 教科・単元名 | 1年 国語 「ほんはともだち」 |

1. 実践活動のねらい

子どもの実態としては、1年生らしく学習に対して意欲が高く、どんなことにも一生懸命に取り組む子が多い。しかし、伝えたい気持ちはたくさんあるが、うまく伝えることができず発表することに苦手意識をもっている児童も少なくない。また、相手のことを気にせず一方的に話をし、トラブルになることもしばしばある。

情報活用能力の育成に向けた学習活動一覧の中には、「受け手を意識した伝え方」の項目がある。しかし、1年生の単元では設定されていない。学習活動の中で1年生でも「受け手を意識した伝え方」の力が育てていけるように計画した。特に、国語の「話す・聞く」単元の中で育てていきたいと考えた。1年生で伝え方を学習することで今後の「くみてる力」や「あらわす力」の基本的な力も育てていけるようにしていきたい。

2. 実践の内容・経過

受け手を意識した発表をするために1年生でも比較的身近に手にする本の紹介をする。相手意識をもつ前には、まずは「〇〇を伝えたい。」「〇〇を教えたい。」という意欲をもつことが大切である。自分のお気に入りの本が見つかるように、日々の読書活動の充実を図っていききたい。また、実際に伝えるときに、どのように受け手を意識できるかを考えさせ、本単元だけでなく日々の学習活動でも活用していく。

■具体的な手立て

(1) 「伝えたい」という意欲をはぐくむために

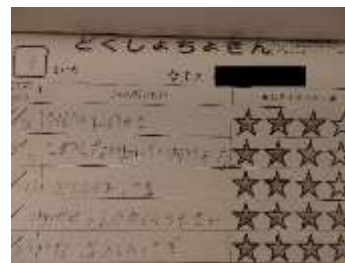
●日々の読書活動の充実

本に触れる機会を増やすために、週1回読書タイムに取り組んでいる。まだ読んだことのない本や何回も読んだことのある本など、自分なりに読書活動を楽しんでいる。毎週火曜日の朝には、読み聞かせタイムとして、担任が絵本の読み聞かせを行っている。自分のクラスだけでなく担任がローテーションで各クラスを回り、普段子ども達が読んだことのないような本を読むようにした。特に日本の昔話を知らない子どもたちが多く、興味をもって聞き入る姿が見られた。読んだ本は教室に置いておきいつでも読めるようにし、本が身近にある環境を作っていた。



●読書貯金の活用

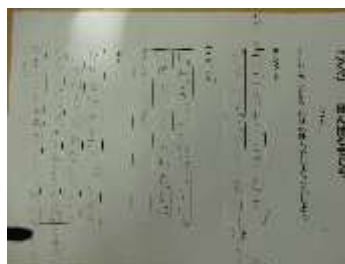
ただ本を読んで終わりにならないように、「読書貯金」に取り組んだ。読んだことのある本を記録して自分がどんな本を読んできたのか視覚的にわかるようにする。本の内容の記入をすると時間がかかるので、読んだ本のタイトルやおすすめ度のみをワークシートに記入し、ファイリングするようにした。今までどんな本を読んだか、どのくらいの本を読んだか、おもしろかったのかを一目でわかるようにし、伝える場面ではその中から選べるようにしていく。そうすることで、「みんなに伝えたい。」という意欲を高めることができると考える。そのためにも、日ごろから本を読む習慣を育てていくようにする。



(2) 受け手にわかりやすい内容にするために

●ワークシートの活用

たくさん本を読んだことで、子どもたちの「この本を紹介したい。」「他の友達のお気に入りの本も知りたい。」という気持ちが育ってきた。そこで、友達に自分のお気に入りの本を伝えるためには、どんなことを伝えればいいのかを聞いてみると、「好きな理



由」や「その本の好きなところ」という意見がでてきた。しかし、本の題名や紹介の終わり方などは、なかなか考えられなかったため、全体で確認した。伝える内容を整理するためにワークシートを活用した。まずは教師が、①本の題名②好きな場面③好きな理由④終わりのモデルを見せる。そうすることで活動の見通しをもち、子どもたちがワークシートに思いを記入しやすくなると考えた。

(3) 受け手を意識する伝え方にするために

●話し方→おはしハム・聞き方→〇〇で聞こう

クラスで「どんな話し方が聞いている人にわかりやすいのか。」を話し合った。子どもたちからは、声の大きさや早さ、はっきりしているか、また話すときの姿勢や向きが大切だという意見が多く挙げられた。みんなが覚えられるようにわかりやすくまとめた。お→大きさ、は→早さ、し→姿勢、ハ→ハッキリ、む→向きと何か発表する前には、この言葉を確認するようにしている。また、聞き方では、耳と目と心の3つで聞くことを日々の学習でも取り入れている。



●実物を見せながら

おすすめの本を紹介するには、ただ話すだけでなく本を見せながら話をするとうわかりやすいことは、子どもたちもよくわかっていて。しかし、なぜ本を見せながら話すとうわかりやすくなるのかを考えていない子どもが多く、ただ見せればいいという子どももいた。実物を見せるよさを考えさせると子どもたちから「絵を見るとその本を読みたくなるから。」「絵を見ると楽しいから。」「もっとその場面がわかる。」などの意見が出た。なぜ実物を見せるのか具体的に価値付けをし、子どもたちに実物を見せることの有用性に気付かせるようにした。また、発表の練習の時に指さしをしながら話す子どもがいたので、それを取り上げより聞き手にわかりやすい伝え方の工夫について考えた。

3. 考察・成果や課題

日々の読書活動は、現在も継続して行っている。本を読み終わると子どもたちが進んで読書貯金をするようになり、自分がどんな本を読んでいるか振り返るツールとして役立った。また、どのくらい読んだか一目でわかるので、次の読書への意欲にもつながっている。しかし、読んだ冊数にばかり目がいって流して読んでいる子どももいた。今後、読書の質を高めていく必要を感じた。

実際にお気に入りの本を伝える活動では、子どもたちは意欲的に活動していた。始めは本を持ちながら話すのに苦労している子どももいたが、何回も繰り返しているうちにだんだんとうまくなってきた。自然と指さしをしながら、笑顔で自分の好きな場面・理由を話していた。ワークシートに書いてある内容以外にも多くのことを話している子どももいて、伝えたい意欲が高かったのだと感じた。書く活動を取り入れたことで、一度頭の中で話したいことを整理でき、活発に話せたように思う。また、話すことが苦手な子にとっても一度書いたことで自信をもって話すことができていた。自分の思いを順序立てて話すときには、有効な手立てだと感じた。しかし、「話す・聞く」活動の中に書く活動を入れると時間的には厳しくなる。特に1年生では自分の思いを書くことが難しい場合もあるので、事前に伝えたいという意欲を十分に耕すことが重要であると感じた。

実践を通して子どもたちは、話すときに実物を見せたり指さしをしたりする伝え方に有用性を感じていた。国語の気に入ったものを家族に紹介する「しらせたいな見せたいな」では、わかりやすく伝えるために、写真をとったり絵をかいたり持って帰ったりして伝えるといいという意見がすぐにでた。算数の授業で自分の考えを伝えあう場面では、右の写真のように注目してほしいところを示しながら説明できる子どもが増えてきた。1年生には、やっていることの意味を価値付けしていくことで、他の学習へ子どもたちが進んで活用していくことがわかった。これからもポスターを使った伝え方やテレビ、タブレットを使った伝え方など様々なものに取り組み、それぞれの伝え方のよさを感じていってほしい。しかし、伝える内容については、課題が多い。相手意識と目的意識をしっかりもたせ、その時に合った伝える内容を指導していく必要があると感じた。学習活動で相手に伝える場面を多く経験させることで、子どもたちに「受け手を意識して伝え方」が育っていくのだと考えている。



